

ブランズタワー札幌大通公園

BRANZ TOWER Sapporo Odorikoen

No. 09-014-2023作成
新築
集合住宅

発注者	東急不動産株式会社・京阪電鉄不動産株式会社 株式会社じょうてつ	カテゴリー	A. 環境配慮デザイン B. 省エネ・省CO ₂ 技術 C. 各種制度活用 D. 評価技術/FB
設計・監理	佐藤工業株式会社一級建築士事務所	E. リニューアル F. 長寿命化 G. 建物基本性能確保 H. 生産・施工との連携	
デザイン監修	フォワードスタイル株式会社 設計協力:株式会社I・A・C		
施工	佐藤工業株式会社札幌支店	I. 周辺・地域への配慮 J. 生物多様性 K. その他	

札幌のデザインを踏襲・洗練させたタワーレジデンス

都心エリアのランドマークとなる全179戸のタワーレジデンス

本建物は中高層の事務所・集合住宅と低層建物が混在するエリアに位置する。

近隣には大通公園や市電など札幌を代表する地域資源が存在するため、様々な視点場からの見え方や、既存の街並みに対する影響への検討が不可欠であった。

低層部は札幌の象徴的な素材であるレンガをモダンなデザインに洗練させて採用し、前面の歩道空間を包含する豊かな緑で潤いのある景観の創出を図った。

高層部は札幌の新たなランドマークとしての見え方を検討し、ガラス手摺面に遠くの雲影と青空を映しだし、夜間は内照式マリオンによる頂部の演出を行った。

外観デザイン

1,2階の柱型には150角のレンガタイルを貼り、1階壁にはシルバークレーの御影石、2,3階バルコニー手摺には黒系タイルを貼ることで水平方向が強調された基壇部となっている。

9階までは水平方向を強調した壁面の塗分けとなっており、街並みの中で連続する中低層のスカイラインに調和する。また10階からは垂直方向を意識した塗分けで、タワーらしいパースカルなデザインを行っている。道路側に圧迫感を与えないために、淡色による配色を行っている。

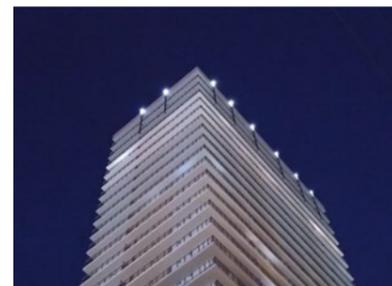
色の選定においては周囲の建物からサンプリングしたベースカラーの分布がN, YR, R系の低彩度・高明度であることから、本計画のベースカラー・アクセントカラーも周囲に調和した赤黄色系、灰色系としている。一部には青みがかった色を使うことで、中高層部のパースカルラインの強調とともに、青みが強い札幌の空に対しての調和を図っている。



南西側より



南側見上げ



頂部内照式マリオン

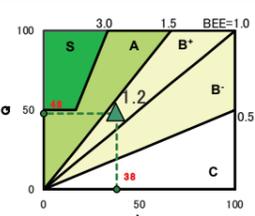


南西より空撮



エントランスキャノピー

建物データ		CASBEE評価	
所在地	北海道札幌市	B+ランク	BEE=1.2
竣工年	2023年	2016年度版	CASBEE札幌
敷地面積	1,854 m ²		
延床面積	15,883m ²		
構造	RC造一部S造		
階数	地下1階、地上29階		
省エネルギー性能	BEI	0.90	



北海道らしさを表現するインテリア

1階エントランスロビーには道産ナラ材の無垢フローリングと天然石材を使用し、木のぬくもりと落ち着きが感じられる場所となっている。

また、オリジナルでデザインした雪の結晶を思わせる六角形のデザインパターンは、エントランスロビーの外部側のアルミ格子や吹抜部分けの壁面、スカイラウンジの床、家具デザイン等にも展開されている。

共用部各所に配されたアートの数々は北海道在住アーティストの作品で構成され、そのモチーフには北海道を象徴した、四季を感じさせる自然のエッセンスが組み込まれている。

省エネルギー性能

全ての住戸開口部は、アルミサッシに加え樹脂製の内窓を設け二重化し、ガラスには複層Low-Eガラス(日射取得型)を採用している。

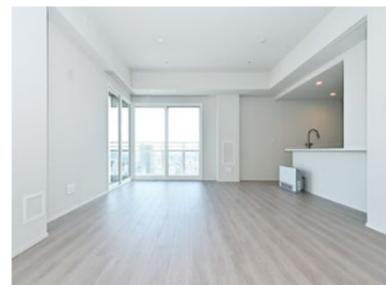
これにより結露や冷気の流入を防ぐほか、T-2相当の遮音性能も確保し、都心部に居ながら快適な居住環境を実現している。

また住戸内の換気には全熱交換器を採用し、熱交換によって、冷たい外気を直接室内に入れることを防いでいる。

給湯及び暖房用熱源には高効率ガス熱源機(潜熱回収型)を採用し、リビングダイニングの暖房に前記熱源機による床暖房を採用し、省エネルギーを図っている。



エントランスロビー



住戸 リビングダイニング



スカイラウンジ



エントランスホール



無足場による施工

バルコニーのPCa化による無足場工法
SHRC工法(※1)採用による、バルコニーのPCa化により、無足場工法による工期短縮と作業床の確保に加え、柱・梁の形状を均一化することで、型枠転用も容易となり、省資源化にも寄与している。

※1 佐藤工業株式会社の保有技術である

Satokogyo Highrised Reinforced Concrete

の略称



制振間柱

制振間柱による制振構造

柱間に、大地震時の振動を吸収する低降伏点鋼を組み込んだ間柱タイプのダンパーを使用した。

これにより地震エネルギーを吸収させることで、建物の骨組の損傷を抑制し、地震被害を軽減させる。

設計担当者

統括：齊藤民雄/建築：牧野創太/構造：畑義雄/設備：小野寺理、池田紀生、星崎華澄、白石晴盛(監理)

デザイン監修：フォワードスタイル株式会社 南部昌亮/設計協力：株式会社I・A・C 渡辺勲

主要な採用技術(CASBEE準拠)

- Q2. 2. 耐用性・信頼性(制振装置)
- Q3. 2. まちなみ・景観への配慮(周辺建物に調和させた外壁色)
- Q3. 3. 地域性・アメニティへの配慮(低層部のレンガ調タイル・無垢の木を使用したエントランス・北海道内作家のアート作品)
- LR1. 1. 建物外皮の熱負荷抑制(二重サッシ 内部樹脂サッシ+Low-Eガラス)
- LR1. 3. 設備システムの高効率化(住戸に全熱交換器設置)
- LR2. 2. 非再生産資源の使用量削減(バルコニーのPCa化による無足場工法)